

## こんぺいとう農園

「中村マゼラン太郎です」初対面の方が、いぶかし気な顔をする前に、こう付け加えます。「本名です。ブラジル生まれです」ブラジルに父が渡ったのは一九七四年、割と最近の移民です。大自然のまっただ中で農業を営むことに憧れ、アマゾン川流域でジャングルの中、耕作地を開きました。

そこで当時「黒いダイヤ」と珍重された黒コショウを二〇〇〇本、栽培していました。というところ、まるで百姓のセガレのようですが、わたしが生まれたときには、父はすでに百姓を辞めていました。黒コショウ畑をひたすら作り続けてきた弊害で、次々と木が枯れて行く病気が広がり、父は夢を断念せざるを得なかったのです。だからこそ、



アマゾンのジャングルを開拓する父



ディレクター時代、アマゾンの農業を取材する筆者

わたしが農業をやろうと思ったとき、何種類もの野菜を栽培する少量多品目を基調とした有機農業を志したのは必然でした。

ブラジルで生まれ育ったわたしは、13歳のある日、父に突然こう告げられました。「日本で勉強してこい」こうしてパブル崩壊の年に来日し、3年だけの滞在のつもりが帰りをきり、結局、日本でテレビ番組をつくる会社に就職することになりました。転職はフリーのディレクターとして報道番組をつくっているときでした。08年のリーマンショックの取材で、失業したブラジル人から言われた一言です。「取材をしてくれるよりも、仕事をくれた方がよっぽどうれしい」それまで、報道の仕事は性に合っていると思っていましたし、時折受けのメディア批判に動じるほどナイー

ブではないつもりでしたが、自分の中で何かはじけました。

どのような経済危機でも必要とされる仕事は何か。農業に転身しようとして、初めて思った瞬間でした。

明治以来、安居山用水によって潤わされてきた田んぼがひとつ、またひとつと、耕作放棄地になっていく。「ぜひ田んぼを使って。農機も貸す」わたしのようなブラジル生まれの「異邦人」に先祖伝来の土地を貸して下さる地主さんのご好意もあり、三年前より農園を始動。

農園名を「こんぺいとう」としたのは、南蛮貿易でポルトガルより渡来したお菓子が日本にすっかり根を降ろしたことにあやかりたいと思ったからです。コメ離れの時代にどんな農業を展開するか思案していた時、一通のメールが「日本のお米が食べたい」ブラジルでレストランを経営する幼なじみか



家族の食卓をまかなうように農的な輪を広げて行きたい

らでした。当地で日本米として出回っているお米のほとんどが隣国ウルグアイ産のカリフォルニア米だそうです。ならば、耕作放棄地をフル活用して、日本産の有機米を輸出できないか。そんな夢もあります。

(2015年4月 記)

## こんぺいとう農園 中村マゼラン太郎

平成29年2月をもって閉園しました。

今後は広告の世界で農業を盛り上げていきたいです。

